ファシリテーション欲求

～うつり・かわり～

冨永　良史

1.　映し絵

雰囲気が固かったり、やわらかかったり、活発な発言が続いたり、気まずい沈黙が続いたり、誰もがいきいきしていたり、早く終わらないかと思っていたり。場のあり方は色々で、それを望ましい方向に促していくのがファシリテーターで、私がその役割を専門とするようになって7年がたち、福井大学教職大学院にスタッフとして参加するようになってから3年がたった。様々なテーマで、様々な人が、様々な規模で集う場を経験し、数えきれない語りに耳を傾け、数えきれない言葉を紡いできた。

様々な場の様々なあり方は、つまるところファシリテーターが、本心の部分で、自分に何を求めているか、場に何を求めているかによって決まるのではないかと思うようになった。ファシリテーターの欲求のあり方が場に反映されているのではないか、と。

場が固いのは、ファシリテーターが固いからで、場が和んでいるのは、ファシリテーターが和んでいるから。だから、ファシリテーターは和むことが大切、というと簡単な理屈になってしまうのだが、なぜ固くなるか、和むにはどうしたらいいか、と考え始めると、単に体の力を抜くとか、心をゆるめるとか、そういう単純なことではすまない。少なくとも私の経験では、そのようにはならなかった。リラックスしようと思ってリラックスできるわけではなく、力が入るには根深い理由があって、私の心の奥底にある、自分自身と場に対する欲求のあり方を考えることが必要だった。

ファシリテーターとして、場で起きることにいかに対処するかを考えるのは大切なことだが、そもそも、その場で起きていることが自分の内面にある欲求の映し絵だとしたら、自分がどのような欲求の持ち方をしているのかを立ち止まって深くとらえなおすことは、よりいっそう大切なのではないかと思い、この小文を書きはじめている。

2.　答えを知っている人

ファシリテーターとしての道を歩みはじめて、最初に自覚したのは、私は「答えを知っている人でありたがっている」ということ。もともと経営関係のコンサルタントをしていて、それは「答えを出す人」であることを求められ、私が答えを出すことによって、喜ばれはするが、相手のモチベーションを持続、向上させるのは難しいと感じ、やはり、答えは自らだすからこそやる気になれるのだと思い、ファシリテーターの道を選んだ。にもかかわらず、私は心の奥底で「答えを知っている人」でありたがっていた。

事前に勉強し、知識をため込み、隙あらばそれを語りたい。対話と学びあいのワークショップを名乗り、参加者が自由に語る場面を多くつくり出すものの、いつのまにか私の語りを聴かせている。私の語りは、事前に勉強したあれこれ

に満ちている。「落としどころ」に向けて進むファシリテーション欲求。こんなものは本当のファシリテーションではない、という思いが膨らみ続けた。

本当のファシリテーションではないと思いながら、そこからなかなか抜け出せなかったのは、それが通用してしまう条件がそろっていたからだと思う。私の仕事は最初、「会議の進め方、話しあい方」を中心テーマとする研修をデザインしファシリテーションすることだった。それは、事前に勉強することが可能だったし、これまでに多くの経験を積んでいたから、自分なりの考え（答え）を身につけていた。テーマが狭く限定されていて、それについて自分の中に答えが用意されていた。だからある程度の時間を参加者同士の演習と対話にさいて、あとは私の考え（答え）にもとづいて解説をしていけば、学びあいのワークショップ「のように」見える時間が出来上がった。私は「知る者」としてふるまうことができた。

3. 期待する

そのうち限界が外からやってきた。依頼されるテーマの幅がひろがり、私が「答えを知っている人」であり続けるのが不可能になった。企画開発、男女共同参画、街づくり、夫婦関係、子育て、授業づくり、IT関係まで。私の狭い「会議についての知識、体験」ではどうしようもなかった。わからない、勉強のしようがない。「答えを知っている人」としてふるまいたいという欲求は、早々に捨てざるを得なかった。ワークショップ「のように」見える場ではなく、本当に対話し、学びあうワークショップの場を創っていかなければならないと思った。私は、自分の知識と経験で何とかするという行動パターンが根深く潜在していることに自覚を深めながら、それを徐々に捨てていった。

答えがわからないテーマを扱うようになって、ワークショップの参加者に期待することを覚えた。それまでは意見を求めながらも、期待の方向は自分自身だったような気がする。参加者に問いかけ発言を求めながらも、最終的には答えを語る自分に期待を向けていた。しかし、答えを知っている人になれないテーマでは、自分に期待することができない。だから、今までよりもさらに真剣に参加者に問いかけ、その声に耳を傾けた。

自分自身をふりかえって思うのだが、自分が知っていることを人に教えるときにも、相手に質問をすることがあるが、それはまるで誘導尋問のようなものになる。ふさわしい答えはすでに自分の中に用意されていて、相手がその答えを言うのを待っている。その答えを言うようにしむける。そのような質問の仕方をしてしまう。相手はおそらく窮屈な思い、試されるような思いをしながら言葉を探すことになるのではないかと思う。以前、ワークショップの参加者から「正解を言うのを待たれているような感じがする」と率直な感想をぶつけられたことがある。そんなつもりはなかったのだが、やはり私の中にすでに答えがあり、その答えを期待しながら問いかけていたから、そんな印象を持たれてしまったのだろう。

4. 答えを教えられたい人

私の中に「答えを知っている人でありたい」という欲求が根深くあるのと同じく、ワークショップの参加者の中にも「答えを教えられたい」という欲求があるのを強く感じてきた。自由に対話し、お互いに気づき、学びあう場だといくら伝えても、参加者は答えがひとつに定まること、私の口から正解が語られること、すっきり腑に落ちる何かを与えられること、を待たれているのを感じてきた。

学びの場においては、「知っている人」が「知らない人」に「答えを教える」のが当たり前だ、という考え方が私たちの深くに根を張っているように思う。私が受けてきた学校教育はそのようなカタチをしていたし、日常生活の場においても、「くわしい専門家」が「何も知らない市民」に「教える」という構図がごくふつうに見られる。だから私たちはそのような感覚に深く染められているのではないか。「気づきあい、学びあう」場を創るには、「答えを教えられるのが学びである」という誰もがおそらく根深くもっている感覚をほぐさなければならないのだろうと思う。

5. 同じ問いの中で過ごす

ほぐすのに何が必要だろう。相手への期待、あなたの答えを教えてくださいと真摯に向けられる問いかけ、だとは思うのだが、それだけでうまくいかなかったことが多くある。いくら問いかけても、相手は固くなるだけ、逃げられるか、当たり障りのない「正解じみた」答えをされるかであって、その人の率直な声を発してもらうには、期待だけでは何かが足りないと思ってきた。私の中にある「答えを知っている人でありたい欲求」を捨てて、相手に期待するだけでは足りない。それでは場の力が引き出せない。

問いが相手に向かうだけでは駄目なのではないかと思うようになった。幸運にも場が活性化した経験をふりかえると、私は単に問いかけるだけではなく、自分でも考えていた。そんなことは当たり前のようにも思えるのだが、なぜか、単なる質問者になってしまっていて、自分自身にはその問いを向けていないことがよくあった。自分が相手に投げかけている問いに、自分自身は向きあわないというのは、私の問いや、存在感に何かの影響を与えているのではないかと思った。私と相手が、同じ問いの中で過ごし、同じ問いを今ここで一緒に考えたい、そう願ったときに、私の問いは相手に響いていたように思う。そんな時に、相手から生み出される答えは、率直で素朴で、表現はわかりにくいこともあるけれど、その人自身が現れていて、そのわかりにくさにもかかわらず、場全体に余韻を持って広がっていく。もちろんファシリテーターとしての私にも響き、私の中から次の展開が浮かぶ。私が展開を考えるのではなく、相手の率直な言葉の響きを受けとめることで、私の中から展開が浮かび上がる感覚があった。そんなときは、事前に考えたプログラム、段取りから自由に解き放たれて、場に身を任せるようにできる。次から次に言葉が生まれ、それを受けとめてさえいれば自然と展開が浮かんできた。

6. 放り出した

事前に考えたプログラムから自由になって、場に身を投げ出すようにして、参加者とともに展開を生み出せているとき、とても幸せで充実した気持ちになる。自分が幸せかどうか、充実しているかどうか、それを判断する間もないくらい没頭できる。場と一体になっていて、流れるように、波に身をまかせて漂うように場が展開していき、その中で起きるあれやこれやに驚き喜び楽しんでいるうちに時が過ぎていく。2時間や3時間など一瞬のことのように思え、終わってから「あぁ楽しかった」とは思うのだが、自分が何をして、何を話していたのか、なかなか思い出せない。没入体験とでも呼びたくなる。

こうやってプログラムから自由になるのは、実際はとても難しい。プログラムを無視すればいいというものではなく、「プログラム通りに進めたい」という欲求を捨て切れないから。

ファシリテーターとしての経験が浅い頃は、事前にワークショップのプログラムをあれこれ考え、タイムテーブルにして本番に臨み、本番では時計をチェックしながら、計画通りに進める努力を怠らなかった。なかなか計画通りには進まなかった。参加者の反応が想定と全然ちがったり、見積もった時間が多すぎたり少なすぎたりで、現場でのつじつまあわせに四苦八苦した。依頼されるテーマが多様になり、自分の知識では対応できないようになるとなおさら、事前のプログラム通りの進行は難しくなった。

そんな経験を何度か繰り返した後、私は、放り出した。プログラムなんかどうでもいいから、今思ったことを話そう、今浮かんだように進めてみようと思うようになった。自棄になったのとは違って、自転車に乗るような感覚に近い。バランスを崩すことを恐れて、あれこれ考えても自転車には乗れなくて、思い切ってペダルを踏み込み、バランスが崩れたらそのときに体の反応に任せることが必要で、そのときワークショップに臨んでいた私は、思い切ってペダルを踏んで後は自分の反射神経にまかせてやってやろうと思っていた。

7. 教えられる人

あれこれ考えていたら見えなかったこと、感じられなかったことが、考えることをやめて我が身を場に放り出したら、見えてきて、感じられた。場が動いているのがわかりはじめた。そこには流れがあって、よどみがあって、波があって、渦が生まれていた。ただ騒然としているだけ

でなく波がよせてはひいていたし、ただ沈黙しているだけではなく、小さなささやきや表情がさざ波のようにひろがっていた。場が動いているのがわかると、それがヒントになって、次に投げかける問いや、場の展開が自分の中に浮かんでくる。そういえば、事前に用意したプログラムどおりに進めたいと思っていたときは、私の頭の中にも視界にも、タイムテーブルと時計が満ちていたなと思い出した。私は場に向きあっていなかった。自分が用意した計画を見つめていたのであり、それから逸脱しないことばかりに意識を向けていたのであり、本当に向きあうべきは、今ここで目の前にいるワークショップの参加者なのだということの本当の意味がわかっていなかった。

今ここにいる参加者に目を向けなければいけないのは、ただの「べき論」ではなく、そうすることでこそ、今ここですべきことが「教えてもらえる」からだと思うようになった。私は、大勢の参加者の前に立つことは、何らかのことを自ら「する」能動的な立ち位置だとばかり思っていたが、考えを改めた。私はファシリテーターとして、何かを「する」人である前に、今ここ、目の前にいる人たちから「教えられる」人なのだと。

答えを知っている人であることをやめ、問いをともに考える人に向かっていたが、さらに、問い以前に、まず「今ここ」から私が感じ取り、教えられなければ、その場にふさわしい問いが生まれないのだと思うようになった。落ち着いて参加者に目を向ければ、そこには「参加者」などとひとくくりにできるような平板な人はひとりもいないことは、すぐにわかる。表情、姿勢、持ち物、語り方、聴き方、年齢、体型、ひとりひとりのあらゆる要素が何かを発していて、それらが絡みあってひとつの場が生まれている。そこで何をすべきかは、その場と向きあったときにこそ「教えられる」のだと気づき、「準備した通りにしたい」という欲求が薄まっていった。

人はひとりひとり違う。日によって、場所によって、関わる相手によって考えることが変わる。そんな当たり前のことに目を向けるのに時間がかかった。目の前にいるのは普通名詞で語られる「参加者」ではなく、今ここにしかいない、この場かぎりのかけがえのないあり方をした「参加者」なのだと気づくようになったのは、幅広い領域の人たちとの関わりによってだと思う。企業関係の人たちと向きあうことから始まった私のファシリテーターとしての歩みは、次第に出会う人の領域が広がり、今では、小学生、中学生、高校生、大学生、大学院生、若手社員、中堅社員、経営幹部、行政関係者、社会教育関係者、教員、子育て世代、高齢者など、年齢層も帰属する集団も多種多様になっている。これらの人たちが、大規模に集うときもあれば、こじんまりとテーブルを囲むこともある。同じ領域の参加者であっても、集う規模によって場の様相はガラリと変わることもわかってきた。目の前にいる参加者のことは、目の前にしてはじめてわかるのであり、事前にどんなに考えてもわからない、と思うようになった。

本番に向けて準備をしプログラムを考えることで、いったんの落ち着きを得ることができる、それは準備をすることのメリットだと思う。が、そうすることのデメリットを深く理解しなければ、準備を緻密にしていく誘惑はとても危険だと思う。緻密にすればするほど、その通りに場を動かしたくなりそうで、怖い。準備の通りに場を動かすということは、今ここ、目の前にいる、かけがえのない多様なあり方を発している参加者を受けとめ損ねることになる。準備をして場を安定的に動かすよりも、準備にしばられず参加者から発せられるいろいろなものを受けとめ、それを手がかりに、参加者とともに場を動かす方が、ずっと面白いし、深いところで安定するのではないかと感じることが多い。プログラム通りの進行は、見た目の安定とは裏腹に、参加者の内面では沈滞や退屈が生まれていて、それではワークショップが目指すこととは正反対になってしまう。

8. 崖っぷちを笑いながら走る

プログラムから自由になるために必要なのは、今ここにいる、かけがえなのい参加者への期待だと思う。ものすごい意見を生み出してくれるとか、正解をズバリ言い当ててくれるとか、そういうことへの期待ではなく、ごく自然体でその場にいてくれて、率直に思うことを表現してく

れること、その率直さが他の参加者の率直さを目覚めさせ、その言葉が事前に準備していたプログラムを忘れさせるくらい響くことへの期待。さらに、ファシリテーターとしての自分自身への期待も大切にしている。私は私に期待している。計画した通りにできる能力を、とうことではなく、参加者がつながりあって生み出す場の流れを深く受けとめることで、これまで自分一人では考えたこともなかったような思いが浮かんでくることへの期待。「私には、○○ができる」という期待ではなく、「私は、今日ここで、何ができるだろう。何が浮かんでくるのだろう」という期待の持ち方をするようなった。私にとって、場に臨む私自身は、何を生み出すかわからない、ひとりの未知なる他者にすぎない。参加者に期待し、自分自身に期待して場に向きあう時、場と響きあい、ともに生み出しあっているような漢感覚がやってくる。あっという間に時間がすぎ、没入してしまう感覚がやってくる。

未知なることは怖いけれど、楽しくもある。準備した通りに進めたくなるのは、想定外の未知が起きることを恐れるからだろう。しかし、想定外のことが起きてくれないと、場がいきいきと展開していくことはない。事前に想定し、計画し、その通りに進め、その通りに終わるならば、それは安定しているのではなく、予定調和であり、ワークショップを開く必要がないし、その役割はファシリテーターではなく、コントローラーのようなものにすぎない。せかっく集ったかけがえのない参加者なのに、その場で起きることが、事前に想定する者の能力の範囲の中だけにとどまってしまう。

私は「崖っぷちを笑いながら走る」のが自分の仕事のだと思っている。事前には想定できなかったことが次々と起きる崖っぷちのような場を楽しみながら、深く受けとめながら次の一歩、次の展開を生み出していく。崖っぷちを走る時、事前にルートを決めることも足の運びを決めることもできない。走り出してはじめて、どう走ればいいかがわかる。そんな身の置き方をする時、ファシリテーターの感覚が伝染するように広がって、参加者は、正解を求めるような窮屈な関わり方を放り出し、自在に発言し始める。そんな光景の中に身を置くと、さらに身を投げ出す勇気がわいてくる。

崖っぷちだからこそ生み出される対話があり、学びがある。予定調和でない、教科書にない対話と学び。それを生み出すのがファシリテーターであるなら、そのふるまいは、準備によって安定したいという欲求ではなく、準備から外れること、想定外のことを一緒に楽しみたいという欲求にこそ支えられなければならないと思うようになり、その思いを持ち続けられるのは、あまりに多様であまりに想定外な「今ここにしかいないかけがえのない参加者」がいてくれるからだし、今ここにしかいない、何をしでかすかわからない自分自身があるからだろう。

9. キッパリわかりやすく

「わからないことをわかるようにしたい」のは自然な欲求だろうし、それに突き動かされて思考も対話も進むのだろうけれど、そのプロセスを速く効率的にしようとすると、失われるものが多い。あいまいなものをあいまいなまま受けとめて、しばらく味わい、思いがめぐり、考えが浮かび上がるのを待つ中でだけ生まれる気づきがある。

あいまいなものをそのままにしておくのは難しい。ファシリテーターとして多くの意見を受けとめていると、整理整頓したくなる。すぐにきれいに、キッパリとわかりやすく図解などして、あぁなるほどそうか、と言わせてみたくなる。私は図解によって思考するタイプらしく、長く話すことや書くことは苦手だが、話を構造的に聴いてわかりやすく整理することは苦にならない。すぐに図解が浮かぶ。だから、人の話を速く整理したい欲求が強かった。今では、それが拙速でしかないと身にしみたので、ゆったりじっくり、あいまいなものをあいまいなま受けとめるようになった。拙速な整理は、語られる言葉、発せられる思いに含まれる意味を殺してしまうと思ったからだ。

ある人の語りに含まれる意味は、そんなに簡単に図解されるほど単純、単調ではなく、いろんな意味がかさなりあい、ゆらいだまま含まれていて、それを私が、わかった気になってさっさ

と整理整頓し図解してしまったら、一見、あぁなるほどと納得したくなるような成果が生まれるかもしれないが、その瞬間に、その語りに含まれていた、つかみがたいあいまいなゆらぎ続ける何かが失われてしまう。ある人の語りですらそう簡単にはつかめないのに、多くの人が集った場に生まれる意味を、速く効率的にきれいに整理整頓などできるはずがない。

そう思ったのは、場に生まれた活き活きとした力を、私の「きれいでわかりやすい整理整頓」によって、あっというまに沈静化させてしまった経験が何度もあるからだ。せっかくの生まれた活力が、つまらない小ぢんまりとした納得に置き換わってしまうのが辛かった。次々に出てくる率直で素朴な思いを受けとめ続けること、受けとめながら何かが自然に浮かんでくるのを待てなかったのは、不安定や混沌への恐怖、もしくは嫌悪があっただろうし、もうひとつは、能力を示したいという顕示欲もあった。

ファシリテーターは「崖っぷちを笑いながら走る」と言いながら、やはり、不安定や混沌は怖いし嫌悪感も浮かんでくる。このまま場がぐちゃぐちゃになっていくだけだったらどうしよう、収拾がつかなくなったらどうしようと不安になり、少しでも速く鎮めたくなる。それに加えて、自分に整理整頓する能力があると思えば、それを発揮したくなる。カナヅチを持てば、でっぱりは何でも釘に見えるのと同じく、混沌を見ればさっさと整理したくなる。そうやって早々にわかりやすく整理整頓した結果が、小ぢんまりとしたつまらない落ち着いた場。もっと言いたいことがあったけど、なんだか整理されてしまったし、それはそれで正しそうだし、あれだけきちんと整理してくれたことを壊すのも悪いし、話すのはやめようか、という雰囲気。私の不安と自己顕示欲とがんばりが場をつまらなく鎮めてしまう。

本当に、完全に放置したら、場がぐちゃぐちゃになってしまうこともあるかもしれない。しかし、そうでない可能性、そこから何かが生まれる可能性は、いつも残されていると思う。私が、速く効率的にきれいに整理整頓することで、後者の可能性は開花への道を閉ざされてしまう。だから放置でもなく、積極的な介入でもなく、見つめ、受けとめつつ、展開が浮かび上がってくるのを待っている。

あれこれ考えずに場を見つめていると、次々に意見が出され、思いが語られ、脱線し、混線していっても、そのうちのいくつかが重なりあったり、脱線だと思っていた脈絡が今まで以上に本質に迫り始めたり、小さなつぶやきがきっかけとなって急に黙考の時間が生まれたりするのが見える。ファシリテーターとして、整理整頓したいという欲求にはフタをして、今ここで何が起きているのかを知りたい、感じ取りたいという欲求を優先すると、そういう場の流れ、潮目のようなものが見えてくる。自分ががんばらずに、我が身を投げ出して、流れの中に漂いながら、耳と目と心を澄ますことで、次にどこへ展開していくのが一番自然なのかを教えてもらえる。

10. 受け身、共振

ファシリテーターとして、受け身であることを肯定的に捉えたい。場に対して、自分が何かを「しよう」と思うのではなく、場から受けとめ、場に「うながされる」ように、何かを「させられる」ように、心身をゆるめておく。能動的に何かをがんばって「する」存在として自分を置いてしまうと自然体が失われるような気がする。場に対して自分の心身をアンテナにして開くような感覚。そのアンテナは、自分ががんばろうとするとすぐに閉じてしまう。キャッチできなくなる。様々な人が集って、つながりあう場に生まれる力、流れに期待して、そこで起きることを面白がり、それを受けとめる自分はどういう展開をするのだろうと期待すること。逸脱、脱線を恐れ、矯正するのではなく、自分が想定もしなかった展開のきっかけとして歓迎すること。「自分が」場に向きあっている、のではなく、「自分も」場の一部になって影響を与えあって、ともに場を展開する。そんなあり方を求めている。場と共振する、という感覚だろうか。

11. ゆらぎ続けるものとして

ここまで、いくつかのファシリテーションにまつわる欲求のあり方を見つめてきたが、気づい

たら、どれも同じような語りになっているようだ。「答えを知っている人でありたい」「プログラム通りにやりたい」「速くわかりやすく整理整頓したい」。どれもが私にとって根深い欲求で、その根はどれも「確かな、安定したものの上に立っていたい」という欲求につながっている。未知の人が集う場に向きあうのは、不安で恐怖で、なんとか確実なものを事前に用意しておきたいと思い、なんとか明解な方向に収束させたいと思ってしまう。

しかし、そうやって、ゆらがないものを求めれば求めるほど、私も場も固くなっていった。答えを知っている人でありたいと望めば、参加者は正解を求めて窮屈な発言に終始するし、準備した通りにしたいと望めば、今ここで起きている次の展開へのヒントを見失い、予定調和に陥るし、話をさっさときれいに整理整頓したいと望めば、いきいきした流れは失われてしまう。そのたびに、「そんなはずでは。なんでこんなことに。。。」と落ち込むことを繰り返してきたけれど、こうやってふりかえれば、表向きの私がどんなに「思ったことを率直に話してください。ここは正解のない学びあいの場です」のようなことを繰り返して言っても、私の内心の奥深くでは、「ズレた答えは言わないで。突飛なこと言われても困るから」という想定外の逸脱への恐怖と安定への欲求が根を張っていたのであり、それに呼応するように場が生まれていたのだから、「こんなはずでは。。。」ではなく、そうなるべくしてなっていたにすぎない。

「こんなはずでは。。。」にならないためには、ゆらがぬものを自分や他者や場に求めるのではなく、ゆらぎ続けるものとしてそれらを受け入れることだと思うようになった。

12. 大切な営み

頭ではもともとわかっていたはずだが、実際にゆらがぬものを求めた心がほぐれ、しがみついていた手の力が抜けていったのは、知っていることでは対応できない未知のテーマにさらされ、多種多様な参加者と関わり、追い込まれ、想定外のあれやこれやに右往左往し、もはや考えても無理だと放り出すような経験を繰り返す中でだった。私のファシリテーションは、参加者の目前でギリギリまで追い込まれる崖っぷち経験なしにはありえない。

ファシリテーションの実践の他にも、私の欲求のあり方をうつりかわらせた大切な営みがある。ゆらぎ、うつろい続ける者としての自分をうけとめあう他者との対話の場が、ふたつある。

ひとつは家族という場。夜、妻に、その日のワークショップの様子や、そこで感じた戸惑いについて語り、率直な感じ方を返してもらう。妻は、ファシリテーションについて学んだことはないので「答えを知らない人」として率直、素朴に返してくれる。妻は、私にとっての「問いかける人」としてあり、自己満足に陥らずに考え続けるための貴重なきかっけをくれる。

小学生の娘には、通じない話し方がたくさんある。私にとって自明のことが彼女には受け入れがたく響くことをたびたび発見する。その度に、私は彼女に通じる語り方を模索する。彼女の感じ方は日々変化し、成長し、めまぐるしくうつりかわっていく。娘は、私にとって最も身近な「うつりかわる人」としてあり、自分のあり方を固定してはならないと戒められる。

私を育ててくれた父母、祖母と向きあい、4つ離れた弟と向きあい、そして今は亡き祖父を思い出す時、かつて彼ら彼女らが私に何をなぜ語ったか、今にしてわかることが多くあり、あぁ自分は何もわかってない子どもだったと恥ずかしくなり、もちろん現在の私にも見えてなくて両親、祖母には見えていることがあるのだろうと思い、弟の目にうつる兄としての私を、私自身が理解する日はやってこないだろうと思う。私の目はいつまでたっても、完全に開かれることはなく、今ここで起きていることの一部を知り得るのみなのだ、と謙虚な思いにさせられる。

もうひとつは福井大学教職大学院という場。県内の現役教師と教師を目指す若者が集い、実践と省察と対話による学びを積み重ねていく。ファシリテーターとして多くの院生の語りに耳を傾けると同時に、スタッフの研究会の中で、私自身の語りにに多くの人に耳を傾けてもらってきた。

そこで語られる物語は、私には「うつろいゆく物語」として受けとめられる。教科書に載っている明解な論理ではなく、迷い、喜び、落ち込み、回復し、また迷う、そんな繰り返しの中で、その人にとっての意味が立ち現れ、刻々と姿を変えていく物語。明解な何かに整理される前の、その人にとっての現実が、「うつろいゆく今ここ」から語られる。私の語りも同様。事実としてひとつに定まらず、そのようでもあり、そうでないようでもある物語。互いにうつろいゆくものを分かちあいながら、自分にとっての意味を日々、更新していく。自明だったはずの現実が、多様な意味を持つ重層的なものとして、ゆらぎながら浮かび上がってくる。

このような営みは私に「うつろいゆくものと向きあう力」を与えてくれている。あいまいで、つかみとりがたい、ひとつに定められない、しかし大切な何かに、拙速に走らず、そのままのカタチで向きあうことで、きっと新しい意味が開けると思わせてくれる。ものごとと向きあうときの「溜め」のようなものが鍛えられている。場という複雑で多様でうつろいゆくものと落ち着いて向きあう力を与えあっているような場、それが教職大学院だと感じる。

13. 私の中の対話

実践と対話の場に促されて、私の欲求はかたくななものから、ゆらぎを受け入れ楽しむるものへとうつりかわりつつある。欲求のうつりかわりに呼応して、景色のうつり方もまた、かわってきた。欲求のうつりかわりは、うつりかたをかえた。場の景色はもともと、目を背けたくなるくらい固く冷たく私を跳ね返すようなものとして映った。ひとりひとりの表情が私の目に映ることはなかった。それが、今は、やわらかく温かく飛び込んでいけるようなものとして映ることがある。ひとりひとりの表情が見え、私がどうすればいいかを教えてくれることがある。しかし、いつもではない。そのように幸せな景色が映ることもあれば、やはり以前のように固く冷たい景色に戻ることもある。私の欲求のありようは、今もまだ、ゆらがぬものをどこかで求め、ゆらぎを受けとめつつも、行きつ戻りつゆらいでいる。

ある私は、「自分も他者も場もうつろいゆくものとして受け入れるなら、「何でもあり」になってしまって、何が成果なのかわからなくなるのではないか」と糾弾する。もうひとりの私は、「成果と不毛を区別しようとするから対話が深まらないのだ。良いも悪いもない、うつろう意味を味わうのだ」と反論する。ある私は、「確かなものがないなら、何も実現できないじゃないか。現実は実現の繰り返しなのに」と迫る。もうひとりの私は「実現、達成にふりまわされて、今ここに自然体でいるということが失われてしまった。何もかもが将来のためで、今ここにいることなどできなくなっている」と反論する。ある私は、「何を理屈をこねているのか。それで参加者に何が得られるというのか。あいまいなことでケムにまいて、それで専門家と言えるのか」とさらに迫る。もうひとりの私は。。。

私の中の対話は絶えることなくゆらぎ続けている。これを未熟というのか、それとも、あらゆるものはゆらぎ続けるということを、私の欲求もまた証明しているだけなのか。いずれにしても、今の私は、このゆらぎに決着をつけたいという欲求は持っていない。

ある欲求が優勢を占めれば、もうひとつの欲求がさらなる深みを求めて進化し、またゆらぎが生まれ、いずれかの欲求が優勢を占め、もうひとつの欲求がさらなる深みを求めて。。。そのようにして、欲求は単なる右往左往ではなく、ゆらぎつつも深化していく過程を持ち得るし、混沌とした多様性を自分の中に抱え込み、うつりかわりゆくことを受け入れることで生まれる深化があるのだと思うようになった。

場がファシリテーターの欲求の映し絵だとすれば、このように矛盾する欲求が相克し深化しあう過程を自分の内に持つことによってこそ、自分の外にある自分もその一部をなす人の集いとしての場に、深化する対話を生み出すことができるのではないだろうか。

（了）